

Title	ヨーロッパロシア北部における結婚儀礼参加者の役割： その特徴と歴史的変遷
Author(s)	伊賀上, 菜穂
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/42251">https://hdl.handle.net/11094/42251</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	伊賀上菜穂
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 16356 号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	ヨーロッパロシア北部における結婚儀礼参加者の役割 —その特徴と歴史的変遷—
論文審査委員	(主査) 教授 藤本和貴夫  (副査) 教授 高岡 幸一 助教授 佐々木史郎（国立民族学博物館） 助教授 ヨコタ村上孝之

### 論文内容の要旨

本論文は、19世紀末から20世紀初頭におけるヨーロッパロシア北部の農村結婚儀礼参加者たちの役割を観察し、農村社会での個人・家族・親族・共同体の相互関係の一端を明らかにしようとするものである。観察対象地域は、ヴォログダ県グリュザヴェツ郡（現在ヴォログダ州グリュザヴェツ地方）である。本論文でいう結婚儀礼とは、二人の人物が知り合って婚姻関係を結び、その事実が社会に受け入れられるまでの全過程を指す。参加者も当事者、親族、婚礼客だけではなく、同村人、他村人、呪術師など、結婚儀礼に少しでも関わる者は全て含む。

本論文の特徴は、郡という限定された範囲内での社会関係を、「結婚儀礼参加者」をキーワードとして包括的に観察することにある。ソ連・ロシアの民族学研究に多い文化圏研究や、地域を限定しないコラージュ的比較研究とは一線を画している。ロシアの結婚儀礼は多層的であり、しかも口頭伝承資料が多い。この複雑さに対応するため、本論文では以下のような方法論を取った。第一に、比較的狭い地域（郡）を観察対象とし、文献資料とフィールドワーク調査の結果を組み合わせ考察した。第二に、地域差・時代差の無視や強引な単純化を避けるため、これらの資料をもとに基本データベースを作成した。その際、特に「時・場・参加者」に注目した。第三に、本研究が儀礼を通しての社会研究であることを重視して、結婚儀礼そのものだけではなく、その背景となる当該社会の産業構造や歴史的背景、家族構造や結婚システムの分析も重視した。

論文は、本文と参考資料の2部構成である。本文は序章と結論を含め全7章からなる。参考資料には、分析の基本として用いた結婚儀礼一覧表や婚礼歌の和訳、およびフィールドワーク資料が含まれている。

本文の第1章「ロシアにおける結婚儀礼概論」では、ロシア結婚儀礼に関する先行研究を紹介し、グリュザヴェツ郡の結婚儀礼が、ロシア結婚儀礼の通時的・共時的流れの中でどう位置づけられるものなのかを示した。またこれまでの婚礼参加者に関する研究については、親族研究と総括的な研究が少ないことを指摘した。

第2章「ヴォログダ、グリュザヴェツの地域概要」では、グリュザヴェツ郡全体及びその11の郷の歴史的・経済的特徴、そして家族制度と婚姻制度を検討した。ヨーロッパロシア北部と中部の境界線上に位置するグリュザヴェツ郡は、これら二つの地域の特徴をあわせ持つ。郡内の郷は、旧領主農民優勢地域と旧国有地優勢地域に、さらに出稼ぎ地域と農業優勢地域に分類された。またそれ以外では、土地割替共同体と頻繁な家族分割など、ロシア中・北部農村の典型的な姿を示した。

第3章「グリュザヴェツの結婚儀礼（1898-1930年代）」では、文献資料とフィールドワークで収集したデータを

基に、19世紀末から1930年代までのグリュザヴェツ郡（地方）結婚儀礼を観察し、記述した。グリュザヴェツ郡の結婚儀礼は、結婚式前・結婚式当日・結婚式後という3段階で構成されており、近隣地域との共通点が多い。特徴的な要素には、同村人による買い取り儀礼が発達していることと、北部ロシアに多いと言われる呪術要素が少ないことがあった。ロシア革命後は簡略化が加速的に進むものの、儀礼の基本構造は1930年代まで保持されていた。結婚儀礼の内容の地域差は、概ね地理的配置に一致した。旧農民カテゴリーの相違ならびに出稼ぎの有無が儀礼形態に与える影響は観察されなかった。

第4章「グリュザヴェツ結婚儀礼の参加者の分析」では、第3章の記述に基づいて、グリュザヴェツ郡の結婚儀礼における参加者を、親族と客、ならびに非親族に分けて考察した。親族と客の分析からは次のような結果を得た。革命前の農村家族には、夫方居住や男系での均分相続など、明らかに父系的傾向が強かった。しかし結婚儀礼に表われる親族関係は、個人を中心として形成される、核家族と擬制的家族（教父母）をコアとしたキンドレッドであった。これは当該社会に親族集団を束ねる経済的・宗教的中心が存在しないことと関連がある。親族による役割分担では、花婿側／花嫁側の違いと年齢・性別原理が重要な意味を持っており、親等や血縁関係、および年長原理が最優先条件というわけではなかった。結婚儀礼に登場する儀礼名称の分析からも、同様に認識的な親族把握が浮かび上がった。

非親族の役割は、年齢・性別原理と同時に、農村生活の季節性との関連が大きい。非親族の役割としては、次のものが観察された。娘たちによる泣き歌と、同じく彼女たちによる花嫁の持参物の準備の手伝い、花婿・花嫁による若者の遊びの会の開催、花嫁による娘と既婚女性の招待、年齢・性別グループごとの買い取り儀礼、そして邪視・呪術・見物である。これらを儀礼内での働きで分類すると、「全共同体承認」、「グループ内の承認」、「結婚の促進」という3種類の機能が確認された。儀礼の中心、つまりリミナリティで行われる全共同体承認では、ターナーの指摘した身分上昇と身分逆転の儀礼の特性が明確に現れることがわかった。つまり規範確認の双方向性と、社会的に劣位な者の象徴的権力の大きさである。グループ内の承認は、この地方では若者の遊びの会、娘と既婚女性の仕事の集まりという形で、具体的に表現された。これらは儀礼の中心から時間的・地理的に離れた場所で開かれる。これは社会の二義的な関係締結の特徴であり、女性親族の交流に関しても観察された。最後の結婚の促進は、結婚儀礼の随所で観察されたが、特にこの若者の遊びの集まりの中で顕著であった。季節と結び付いた結婚サイクルの中で、一つの具体的な結婚は他の未婚メンバーの結婚を促進する働きを持っていることが明らかとなった。

第5章「革命後の変化」では、グリュザヴェツ地方農村結婚儀礼の、ロシア革命後の変化とその要因を考察した。ソ連政府が行った儀礼政策のうち、グリュザヴェツ地方の結婚儀礼に大きな影響を与えたのは、1930年代の教会閉鎖と1960-1970年代に導入された登録式だけであった。しかもその結果は、教会結婚式と登録式が入れ代わっただけで、結婚式当日の基本構造に大きな影響は与えなかった。ただし、個々の儀礼要素の意味と参加者の関係は大きく変化した。家族をコアとしたキンドレッドという親族のとらえ方は、現在も革命前と共通している。だがそのキンドレッドに友人や同僚といった非親族も含まれ、メンバー間の序列もないことが特徴である。逆に地縁共同体との相互交渉性は小さくなった。現代結婚儀礼は、花婿と花嫁を中心として集まった親族、友人、地縁関係の平等と重要性を確認する場として機能している。ソ連社会を生き抜くために、親族・友人ネットワークが利用されてきたことの反映であると同時に、ソ連の推進した「個人」尊重政策も確実に定着していったことが明らかとなった。都市と農村の儀礼要素を比較すると、農村と地方都市の儀礼の類似と大都市の異質性が際立っている。これには革命後のソ連政府による都市文化の否定と、地方都市への農村人口の流入が影響している。しかし儀礼参加者の関係では、地縁関係の違いを除けば、農村と大都市の特徴は類似している。農村、大都市を問わず、かつて個々の共同体が持っていた各成員に対する影響力を、ソ連政府が利用できなかったことが再確認された。

本論文は結婚儀礼参加者の総括的な分析を目的としていたが、グリュザヴェツ郡においては、結婚儀礼で調整される関係の多さと、その時間と場所を少しずつずらした多層構造が解明された。儀礼の中心においては、ドルーシから儀礼名称を持つ者たちが、二つの親族の間、および親族・地縁共同体の関係を象徴的に仲介する。一方その前後においては、父母たちがそれぞれの家族の関係を、花婿と花嫁は自分たちの年齢・性別グループとの関係を調整していく。ソ連時代になると、農業集団化と近代化によって、共同体が大きな変質を被り、このような様々な位相を調整する必要は消滅した。公私の関係の分離により、平等性を特徴とする私領域を共有することになった家族・親族・友人・隣人の関係の調節は、かつてほど困難ではない。現代結婚儀礼の指揮者である「立会人」の選択肢が花婿と花嫁の友人

男女で固定されるのは、結婚儀礼に花婿と花嫁の視点が活かされるようになってきたというだけでなく、儀礼参加者の関係の調整が容易となったことも影響していることが明らかとなった。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、ヨーロッパロシア北部に位置するヴォログダ州グリャザヴェツ地方の結婚儀礼における参加者の役割のあり方を分析し、歴史的な変遷をたどりつつその意味を解明したものである。分析の対象となった時期は19世紀末から現在にまで至り、その間、70年間におよぶソ連社会が帝政期の結婚儀礼に与えた影響の分析をも含め、広い文脈のなかでロシア社会を解明した優れた研究であるといえる。また本論文に参考資料としてつけられた結婚儀礼に関する膨大なデータベースは、今後の研究者への大きな貢献となる。

本論文の特徴のひとつは、帝政ロシア農村社会の構造をグリャザヴェツ郡というほとんどこれまでロシアでも研究されてこなかった郡（中規模）レベルの地域に焦点を当てて、結婚儀礼における参加者の役割などを分析していることにある。そのため、筆者は綿密に先行研究と文献資料の発掘を行なうと同時に、現地のフィールドワークによる考察をこれに組みあわせた。

その結果、帝政期農村における結婚儀礼の参加者の役割が詳細に明らかにされると共に、儀礼の基本構造がソ連時代の1930年代まで保持されていたこと、ソ連政府が行なった儀礼政策で影響を与えたのは、30年代の教会閉鎖とその後の登録式だけであったが、儀礼要素の意味と参加者の関係は大きく変わったことが明らかにされた。本研究は結婚儀礼を通じたソ連社会の分析としても大変興味深いものである。また結婚儀礼にかかわる語彙の研究も詳細になされており、言語を通じた文化研究に新たな道を開く可能性を秘めたものでもある。

ただし今後の問題として、古儀式派の問題を考慮するならば、農村の儀礼がそのままロシアの儀礼といえるかどうかという議論が必要であろうし、結婚制度と儀礼の関係についても明快な説明となっているとはいえない。

とはいえ、本論文のすぐれた成果は損なわれるものではない。本審査委員会は本論文を博士（言語文化学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。